浄厳律師の本不生説について

藤谷厚生

はじめに

浄厳律師（一六三九―一七〇二）は、字を覚彦と言い、妙極堂、瑞雲道人などと号した江戸前期の真言宗の学匠である。律師は河内国に生まれ、幼少から高野山に登り顕密を修学し、後に密教の諸流を統合して新安祥寺流を創草するなど、特に密教の事相面で多大な功績を残している。延宝五年（一六七七）には河内の実家を延命寺と改め、さらに江戸に赴いて元禄四年（一六九一）には柳沢吉保の推挙により、幕府の助力を受け江戸湯島に霊雲寺を開創し、これを如法真言律の道場として多くの僧俗に授戒するなど、戒律の普及と真言密教の復興に尽力したのであった。(1)

浄厳律師についての研究は、上田霊城氏の「浄厳の三昧耶戒観」（『印度学仏教学研究』第一六巻第一号、一九六七）の論文等が若干あるばかりであり、またその独自の真言思想について、特にここで問題とする本不生説については、その内容、特徴について従来ほとんど研究考察されて論じられることはなかった。(2) 本稿では、江戸前期の仏教復興の流れの中で、新たに如法真言律を提唱し、関東を中心に真言宗の復興を図った浄厳律師について、律師が元禄三年（一六九〇）に起草した『真言修行大要鈔』をテキスト資料として取りあげ、そこに見られる律師が主張する本不生説の特色をここに明確にしてみたいと思う。

一　阿字の実義としての本不生

『真言修行大要鈔』は浄厳律師が、元禄三年（一六九〇）七月に真言密教での修行の要諦を、漢字仮名交じり問答体で述べ著した典籍である。ここでは、その最要の実践修行は阿字観であると強調され、その阿字の実相を説く上で、まず本不生が説かれることになる。（以下、『真言修行大要鈔』の文章を資料として引用）(3)

真言修行の要道は、阿字観に過ぐることなし。…三つに実相とは、阿字の実義なり。その実義を云わば、一切諸法本不生（大日経

印度學佛教學研究第六十七巻第一号　平成三〇年十二月

の文なり）とて、ありとしあらゆる天地の間の万物より、仏菩薩も地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、諸天も悉くみな本来本有にして、始めもなく終わりもなし。生ずるに似たれども、今始めて生ずるにあらず。また昔生じたるにもあらず。滅するに似たれども、今始めて滅するにあらず。後に必ず滅すべきにもあらず。常住にして動転することなく、遷変することなしと知る。これを本不生の実義と云うなり。但しこの義は、甚深幽玄にして、…ただ仏のみ能くこの真実を明らめたまえり。縦使、文殊、弥勒、普賢、観音の如き大菩薩も、自分にては解知することあたわず。…この故にこの位は、法相（弥勒の法門）、三論（文殊の法門）、天台（観音の法門）、華厳（普賢の法門）の四宗大乗の知るところにあらず。ただ、真言一宗のみ大日如来より嫡嫡相承して今日まで伝え知るものなり。

（『真言修行大要鈔』一頁下段）

まず阿字観の要諦として、阿字の実義（真実の意味）が説かれる。ここでは「一切諸法は本不生」であるということが強調される。これは言うまでもなく『大日経』の文を受けて、阿字門が一切諸法本不生であることを開示する要道だと主張しているのである。ここで重要なことは、「本不生」を「悉くみな本来本有にして、始めもなく終わりもなし。」とあるように、「本有」の意味として本不生を定義づけている点である。本有ということは、本来生じたものでもなく、また滅するというものでもなく、常住不変であるとされ、これが本不生の真実義であると述べられる。しかも、この本不生の本有の義は、誠に奥深く凡夫が到底理解できるものでもなく、文殊や弥勒などの大菩薩にも理解は難しく、法相、三論、天台、華厳の他の大乗四宗でも知り得ない境地であるとされ、真言の教門にのみに説かれたもので、大日如来から師資相承して教え伝えられた真髄であると強調される。

問う。禅宗は諸宗に超えて教外別伝とて、師家の示しに任するにはあらず。ただ、自己に返照し工夫して悟道するを本意とす。…今、真言の実義は師の教えを待って解すると云えば、禅門の心地には頗る劣れるにや如何。

答う。教を待たざれども自得するは、法の勝れたる規模にはあらず。ただ、これ機の勝れたる故なり。…声聞は鈍根なるが故に他に教えられ、独覚は利根なるが故に自悟すと云うこと、経論に明らかに見えたるところなり。禅法も機の鈍なるは、始めは先に教えられずんば、何を拠としてか至ることを得べきや。

さて真言法は、必ず仏の教に依らざれば、解すること能わずと云うは、その理、究竟最上にして大菩薩もその境界にあらざる故なり。…ここを以て、密宗は師資相承を以て規模とす。然るときは、自ら工夫して得るは、なおその理の浅き故なり。他に教えられざれば入ることあたわざるは、却てその理の深き故なりと知るべし。

（『真言修行大要鈔』四頁上段）

次に禅宗の教導方法と対比して、本不生の理（悟りの内容）の優位性が説かれる。真言の実義によれば、師から直接教えられて、真実義を理解し悟るというのであれば、自己に照ら

して内省して得られる禅宗の悟りの境地に比べて、さらに劣るのではないかという疑義である。

これに対しての答弁は、他から教わることなくして自ら悟るのは、その人（悟る側）の機根が優れているからであり、法（悟りの内容の側）が勝れているからではないという。つまり真言の教えでは、必ず仏の教えによらねば理解できないというのは、その理（悟りの内容）が究極最上であるからであるという。ここでは、当時盛んであった禅宗の悟りより真言の方、つまり本不生の理の方がより奥深く、その境地が高邁であるとして、その優位性が力説される。

禅密の理の浅深は、本不生の理を明かすに、自ずからあらわるべし。先ず本不生の義を広説せば、凡そこれに相濫すること多し。…先ず正見に似たる邪見を弁知すべし。一には、本不生と云うは、本は生ぜずと云う義なりと意得て、目前歴歴たるところの万法は因縁より起こる。因縁未合せざる已前には一物も無し。故に、本は生ぜずと云うなりと解す。これ天台宗に…一念不生の処を強いて中道と号すると。三論宗に…因縁生の故に自性無し。自性無きが故に、畢竟して空なり。…また因縁生とは談ぜざれども、禅家に本来無一物と云うもこれに同じ。二には、また一類の人、錯って解することあり。謂く、本不生は本有の義なり。本有と云うは、松は何も松なり。竹は何も竹なり。人は三世に人なり。畜は三世に畜なりと思う族あり。これは外道の常見に全く同じなれば、この二義共に謬見なり。また華厳宗に真如の理性より、自ずから万法を生ずと云うもこれなり。

（『真言修行大要鈔』五頁下段）

さらに、禅宗と密教とでの理の浅深を峻別する上で、本不生の理を明らかにせんとする。しかし、ここでは本不生の義を広説すると、却って紛らわしくなるということで、本不生の意味を誤ってとらえている邪見（謬説）をあげることによって、その相違を明確にする訳である。第一に「本不生」を「本は生ぜず」と捉える謬見である。これは、他の大乗諸宗では、目前にある万法は因縁より起こり、因縁がまだ合せない以前には、一物も存在しないと捉える見方である。天台宗では一念も生じない処を中道と説き、あるいは三論宗では因縁生によって空を、また禅宗で「本来無一物」と説くのもこれに同じだとし、これらは「本は生ぜず」と見る、つまり空であるとか、無であるとして「本不生」を捉える見解であり、これが誤りであると断言する。さらに、第二には、「本不生」を常見的な本有と見る誤りである。つまり本有と言うことを、竹はいつまでも竹であり、人は三世に渡り人であるなどとと見る訳であるが、これは外道の常見と変わらないので、これまた謬見であると論断される。また、華厳宗のように真如の理性から、自ずから万法が生じると言う見方で「本不生」を捉えるのも誤りだとされる。このように、ここでは他の大乗諸宗の見解である無自性空の立場で捉える本不生の

理解を、すべて謬見として否定するのである。

二　一切諸法はそれぞれ万法を具す

さて、真実の本不生の義と云うは、一切色心の諸法、各の一一に万法を具えたり。…ただ今は人にして、人の形を具えたれば人と名づくれども、もし一念、瞋恚を起こすときは、即ち地獄の火なり。一念の慳悋を起こせば、即ち餓鬼の飢渇と成る。…もし十二因縁を観ぜば、縁覚なり。もし自らを利し、他を利する心おこらば、即ち菩薩なり。もし諸法の本不生を観ぜば、即ち仏の心なり。頼耶の別種子にあらざることを能く弁ずべし。かくの如く人の心に本より十界を具えたり。自余の九界にも、また各余の九界を具えたり。これを新たにそれぞれの心起と見るは、四宗大乗及び禅門の意なり。本有なるが故に、縁に依て顕るると云うは真言の意なり。…仏はこの本有の理に通達したまうが故に、自他平等にして、能く他の心を知り、能く無量の形を変現す。…みな本有の法なるが故に、本より具わりたるが、不図あらわるるなり。…かくの如く、万法に歴て各各に万法を具えたりと知る。これを本不生の知見と云うなり。

（『真言修行大要鈔』六頁上段）

それでは、どう捉えるのが正しい本不生の義（意味）であるのか。これに対して、真実の本不生の義は、「一切色心の諸法は、各々それぞれに万法を兼ね備えている」という見解である。つまり我々衆生は自身の心に十界を具えているのであり、それぞれの世界の衆生が他の九界を具えているという十界互具の立場がここに示される。この十界互具の概念は、もとは法華経などに基づいて説かれる天台の思想であるが、ここでは諸法が万法を兼ね備えている喩えとして、十界互具の例をとりあげている。また法相唯識では、阿頼耶識の種子の現行によって十界の別が生起すると見る訳であるが、ここでは、頼耶縁起の種子によって起こるものでもないと否定され、こういった十界が新たに各々の心から生起すると見るのは、法相、三論、天台、華厳などの大乗四宗や禅宗の見解であり、縁によって本有の心から顕れると見るのが、真言宗の見解であると主張される。このように万法が各々万法を具えていると見る見解を「本不生の知見」とここでは定義づけている。

凡そ、本不生の実義を事に因て近く云わば、仮令ばここに一の方木あらん。これを四の角をおとせば、八角と成る。なおその角を悉くおとせば、円く成る。…かくの如く様様にするに、この方木に四角、八角、円、三角、半月、長短、高下、麁細、厚薄の十三の形あり。然るに智慧ある人は、方木に一刀をも下さざれども、心を以て思惟して十三の形を具えたりと知る。（これ仏の知見の如し。）愚人は断割せざれば、ただ方木とのみ知る。種種に断割したる時、始めてこれは八角なり、これは円なり、これは三角なり等と見る。（これ、凡夫の因縁より生ずと見る知見なり。）

密教には始めより具えたる処を示すが故に、本不生と説く。顕教には、縁を寄せて顕れたる処を愚人の心に随って示すが故に、無生と説き（未だ断割せざる時の如し）、或いは因縁生と説く（断割し

て後の如し）。禅門の意は、無生を示す。…これを以て見るに、密教は未だ第二に落ちざる処に於いて、歴歴として万法具えたるを、極大頓機の為に説く。自余の諸経は次次の下劣の機の為に説き示すが故に、一物も無き処を本来本分と示す。真言宗と諸宗との勝劣、爰に明らかなり。…もし仏智を以て見ば、一切諸法みな悉くかくの如くなるべけれども、凡夫は無始より已来の無明（愚痴を云うなり）厚きが故に、…万法に通ずること能はざるなり。もし、この本不生の理を決定して信知するときは、自身に本来仏智を具えたりと知る。また諸の作業、みな仏の所作なりと解するを以て、成仏すること甚速なり。

（『真言修行大要鈔』八頁下段）

さらに、本不生の実義について、ここでは分かり易く例を以て説明しようとする。例えば四角の木板があり、その角を切り落とせば八角になり、さらに切り落とせば次第に円形になるように、切り方次第で四角の木板が十三のパターンの形に変化するという。智慧のある人は、思惟して元の木板の中に十三の形が備わっていると悟り知る（仏の知見）のであり、愚かな人はまだ切断しなければ、単なる四角の木板であるとしか見ず、断割してはじめて様々な形を理解する（凡夫の知見）ようなものであるという。真言密教は、はじめより様々な形、つまり万法を具えた処を説き示すので、これを「本不生」として説くのであり、他の顕教はこれを「無生」（まだ裁断する前の形のような場合）とか、または「因縁生」（裁断して変形した後のような場合）と説くのであるという。このように真言密教は、まだ次の展開に移る前に歴然と万法を具えていることを、機根の優れた極大頓機の衆生のために説いた教えであり、他の大乗諸経はさらに機根の劣った衆生のために説き示されたものであるとここに述べる。本来、仏智をもって見れば、一切諸法は悉く万法を互いに具えていると分かるのであるが、凡夫は無明が厚いので、万法に通じることができないという。ただ、この本不生の理を信知する時は、自身に仏智を具えていると理解できるとされる。

三　大乗諸宗の教えは仏の方便

問う。前に聞きつるは、本不生にあらざるは、みな邪見なりと。もし爾らば、法相、三論、天台、華厳及び禅宗に、本源の法性は寂滅無相なりと云うは、みな邪見なるべしや。…

答う。大日経に云わく、離於邪見通達正見（已上）。この正見と云うは、本不生の実義なり。ここに知んぬ本不生の外の見解は、みな邪見なりと云うことを。但し邪見と云えばとて、外道の断見、常見の因果を撥無するが如くにはあらず。…されども仏法は、因縁生の義を本として因果を立つるが故に、人を悪くすることは無きなり。…仏の意には、無生の理を至極とは欲せざれども、衆生の執着を払わん為に、権に寂滅を至極と説きたまうなり。…然れば、諸宗はみな仏の方便の片端を、一づつ取って、面々にこれを至極と思えるなり。もしこれは至極にはあらずと知る時は、偏見、邪見にはあらず。これのみ至極なりと執する時は、仏法ながら邪見と成るな

り。

（『真言修行大要鈔』十頁下段）

さらに、先に「本不生」の見解でなければ、みな誤りの邪見であると主張されたが、法相、三論、天台、華厳また禅宗などに、究極的な本源の法性は「寂滅無相」であると説くのは、みな邪見になるのではないか。もしそうであるならば、仏がこれを衆生に説いたのは、邪見を教えたことになるのではないかという疑義である。

これに対する主張は、ここでの正見とは「本不生の実義」であり、本不生の見解以外はすべて邪見であるとされる。ただし、邪見とは言うものの、外道の断見や常見のような因果の道理を完全に無視して信じないという訳ではなく、一局に偏った見解であるから邪見というのであり、他の大乗の教えは邪見とは言っても、因果の道理を説くので、人を悪くすることはないとされる。

また仏が邪見を教えたとの疑難については、仏は無生の理を最高の教えとは考えてはいないのであるが、衆生の執着を払いのけるために、仮に方便として寂滅を最高の教えとして説いたのであり、決して偽りではないとする。つまり、大乗諸宗の教えはどれも仏の方便であり、それぞれが自らの教えこそが最高の教えだと思い込んでいるに過ぎないという。それ故、各々の教えこそが必ずしも最高である訳ではないと見るならば、それは邪見ではないのであり、これこそが最高だと固執して見る時は、どれも邪見となるのであるとここでは強調される。

問う。もし然らば真言宗の本不生も、もしこれ真実なりと執せば、また邪見なるべしや。

答う。尤も爾りなり。本不生を麁く意得て、これを真実なりと執せば邪見なり。能く本不生を明らむる時は、これに諸義を具えたるが故に、ただ無生の義、因縁生の義のみに非ず。…荘老孔子の教、揚朱墨翟が説までも、みな悉く法界の一門、万徳の一徳なれば、何も捨つべきにあらず。…但し本不生の実義も執せば、邪見なるべきかと云う事は、本不生の真実を能く解したる者は、一義をも執する事あるべからず。…かくの如く諸見に自在を得て、一見にも滞らず。滞らざるときは邪見にあらず。これを真実の仏知見とは云うなり。

（『真言修行大要鈔』一二頁上段）

また次に、もし真言宗の本不生の教えも、これが真実であると固執すれば、邪見となるのではないかという疑問についても、本不生を粗雑に捉えて、これのみ真実だと固執するならば、それは邪見になるという。よく本不生の意義を明確に理解する時は、それが諸義（あらゆる意味）を兼ね備えている故に、大小乗諸宗の教えも、また諸子百家の教えさえも、みなすべて法門の一門、万徳の一徳を表しているものであるから、否定すべきではないと主張する。このように、諸の見解において自由自在に通達し、一見解にも止まらないならば、

それは邪見ではなく、まさに真実の仏の知見であるとされる。

四　六大に万法を具して本有常恒とみる

問う。天台宗に一念三千の法門を談ずるも、真言の本不生と同じかるべしや。

答う。似たることは似たれども、全く同じにはあらず。その故は、天台には真如無相の空理を一心と名づけて、…三千の諸法を具すと立てるなり。真言宗には空理を本源とするにはあらず。地水火風空識（識と云うは心なり）の六大を本体として、万法みなこの六大を体とす。六大の処に万法挙げて有と立てるなり。この故に、一微塵までも万法を具して、本有常恒なり。また次に、天台にはただ一心に諸法を具するうわさのみにして、分明に事に歴て修行することなし。真言には、一字に無量の義を具し、一印に無辺の徳をあらわし、一心の中に諸尊を観想す。…諸宗に超過したる法門なり。能く能くこれを味わうべし。なお本不生の義、無量無辺にして劫を歴ても尽くしがたし。面に臨んで決すべし。

元禄三年庚午七月十四夜草草而記　伝密乗沙門浄厳

（『真言修行大要鈔』一三頁下段）

最後の問いでは、先に十界互具であり諸法が万法を兼ね備えていると述べているが、それでは天台宗で説かれる一念三千の法門は、真言で説く所の本不生の教説と同じではないのかという疑義である。

これに対しての答釈では、天台では真如無相の空理を一心と名づけて、一心起こる時、その一心に三千の諸法を兼ね備えるという一念三千の法門を立てる。真言宗は空理を本源として立てることはなく、六大を本体として立て、六大に万法を具すと見て、本有常恒なることを説く。つまり、ここでは天台は空理を本として、一心生起するときに同時に三千の諸法を兼ねると見るのに対し、真言はあくまで本有であり、六大を本体として、六大の中に万法がすでに兼ね備えられていると見るという点が明確な相違であると述べられる。また、真言では阿字観のように、一字に無量の義を具足し、一印に無限の徳を顕示し、一心の中に諸尊を観想するという三密加持の修行、即ち諸法が万法を具すことを感得する実践の修行があると力説される。ここでは特に他宗とは違うという真言宗の特異性や優位性が強調される。最後に、本不生の意義は無量無辺であり、自ら実践修行をしてそれを悟り解決するよう教示してこの論説は終えられている。

むすび

以上のように、浄厳律師は教相判釈的な姿勢で、真言宗での本不生を本有常恒と解釈し、その本不生の知見が他の大乗諸宗よりすぐれた見解、悟りの境地であると説くことで、その優位性を主張しようとしたのである。その上で、特に当時

盛んに広まっていた禅宗などの教説を批判牽制し、さらに本不生を無自性空の立場で意義づける他の大乗諸宗の見解を否定し、天台や華厳などの教説を取り入れ、「万法が万法を具すという」独自の見解によって、従来に見られない新たな本有常住説を立てたのである。また、特に宗祖弘法大師の唱えた六大体大説を否定することなく、「六大に万法を具すとみて本有常恒なる」と解釈意義づけたことは、本不生の本有常住説を以て、六大体大説と阿字体大説を統合的に意義づけようという強い意図が、そこにはあるものと推測する。

律師がその著述において、本不生について言及したものには、天和二年（一六八二）刊『悉曇三密鈔』が挙げられるが、これには本不生を本有と提起はするものの、その本不生説の内容についての詳細は述べられてはいない。本稿の『真言修行大要鈔』［元禄三年（一六九〇）］を以て、初めて明確にその内容、特性が主張されることとなった訳である。また律師はその翌年元禄四年（一六九一）に、『真言修行大要鈔』での本不生説を敷衍する形式で『弁惑指南』を撰述刊行して、他宗との教判の中で本不生説を基底に、真言の優位性を説くのであるが、この書が広く市井に流布することで、当時の宗門の教学に大きな論争を引き起こすこととなった。それは、智山の運敞僧正が『弁惑指南』の本有常住説の反駁書として、元禄六年（一六九三）に『本不生顕密同異義』を著述刊行したことに見られるが、その論争の顛末と内容の検討については今後の研究を待つこととして、特に本稿では浄厳律師の本不生説の内容、その特性について言及した次第である。

1　浄厳律師については、上田一九七九、藤谷厚生「浄厳律師の戒律観について」（『印度学仏教学研究』第六五巻第一号、二〇一六）二六頁以下を参照。

2　これまで宗門では、浄厳律師の本不生説を「本有常住説」、これに反駁する智山の運敞僧正のそれを「無自性空説」と一言述べるだけで、その内容の相違、特徴を詳細に検討する研究論考は見られない。宮坂宥勝「阿字本不生再考」（智山学報第四七輯、一九九八）五四頁参照。

3　本稿での『真言修行大要鈔』の本文は、藤谷二〇一七の中でテキスト『真言修行大要鈔』の翻刻・語注を行ったので、これより引用掲載した。

〈参考文献〉
上田霊城『浄厳和尚傳記史料集』名著出版、一九七九
藤谷厚生「『真言修行大要鈔』について」四天王寺大学紀要第六四号、二〇一七

〈キーワード〉本不生、本有常住、浄厳律師、『真言修行大要鈔』

（四天王寺大学教授）